

審判

堀田善衛

審判

昭和三十八年十月二十八日 第一刷発行 ©

定価 五百八十円

著 著 堀 田 善 衛

発行者 岩 波 雄 二 郎

発行所 株式会社 岩 波 書 店

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
精興社印刷・松岳社製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

第一部 一

一つの物語の終りから／グリーンランドで／銅像と女優と外務大臣／拾収不能／天皇に会いたい／恭助・雪見子・唐見子／夜／日ざかり／選ばれた一人／横浜へ／邂逅・奇妙なアメリカ人

第二部 三

まったく手ぶらで／颯風、井戸ヨリ起り、洪水、沙漠ヨリ来ル／オテテとサンチョ・パンザ／「日ソ漁業から日米パン屋へ」／誰にも言っていない／生きて行ける、やっで行ける／銚子の河口でんしのぎ／俱会一処／続俱会一処／続々俱会一処／それは本当か／「時は迫れり」／クツウの周囲／キリストは一人か／人との交通について／雪見子の話／古めかしさ／悪の必要

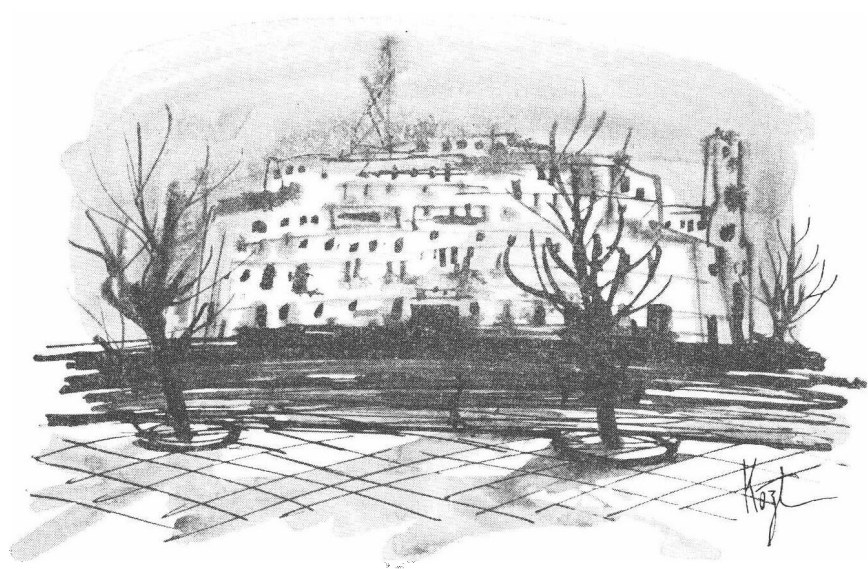
第三部 三〇七

子供たち／人おのおのはそれぞれの／原爆プロレタリアート／＼いかなる
足ぞ、この足は＼／続＼いかなる足ぞ、この足は＼／まったく、さびしくな
い＼／お婆ちゃんも鬼だ／どうでもいい地獄なんにもない地獄／続どう
でもいい地獄なんにもない地獄／＼空白の頁＼／なぜ唐見子はボールを殴っ
たか

第四部 四三三

自殺の時／プールを造る／＼トタルメンテ・ソロ＼／＼人生の歓楽＼／広島
にて／俱会一処

第
一
部



一 一つの物語の終りから

闇の底の方から、一条の赤が筋をひいて立ち昇って来る。その赤い筋が、さめかけた意識の、その入口へ、薄暗い無意識との境界を抜けて立ち昇って来たときに、ふと思ったのだ。これは、ひょっとして最後となるのではなからうかと。と、そこでびくりとからだをうごかし、船がかすかに揺れていて、耳にエンジンの音がひびいて来ているのを知り、もういちど、今度は立ち昇って来る赤い条痕に似たものとしてではなく、あきらかなことばで考えた、ひょっとしてもうアメリカへは戻らぬということになるのではなからうかと。眠っているあいだに出港したらしくて、船室の丸窓から見えていたシアトル港の上屋やそこに集った見送りの人々の姿はすでになく、どんよりと曇った十月の午後の空だけが見えていた。もしこれが最後だったとしたら、船の上からアメリカに別れを告げる機会を逸してしまったことになる……。もっとも、南部で生れ南部で育ったボーリ・リポートにとっては、北西部、太平洋岸の、それもアメリカとしては北の端っこであるシアトルなどは、それはもうほとんど外国であった。

なぜ、しかし、ひょっとしてこれが最後かもしれない、もう戻らないかもしれない、などと、しかも眠っているあいだに思いついたりしたのだったろうか。ベッドに横になったままで、大小のパイプが何本か通っている船室の天井を見上げて、ほとんど習慣になってしまっている「Q・A」、質問・応答をはじめた。答えは無数にあった。ありすぎた。だからリポートは、その問いに答えをつけることをやめて、あらためて船室を眺めまわした。自問自答の際には、答えが無数に、ありすぎるほどにありうると思われるときには、その問いを払いのけてしまった方がよいのだ。医者が、精神分析医がついていてくれるときならば、ひとつひとつ、ゆっくりとありうべき答えをならべて行くのがいい。けれども、ひとりのときにはそれをしない方がいいということ、このところ数年にわたった、断続的な療養生活で知らされていた。またその問いはあまりにも重すぎた。問いのかたちを見定めることが出来ないほどに大きすぎた。しかし、予感がないわけではなかったのだ。はじめて見た日本人のステュワードに案内されて、Bデッキの、この215号室に入ったとき、天井に塗られた白ペンキの、そのあまりな白さにちよっとぎくりとしたのであった。完全に「治癒」しているというものの、病状がはげしかったときの、その病状についての記憶というものは、やはり消し

がたぐのこっている。天井の、その白さがリボートには厭だった。がしかし、そのほとんど識閥の外、無意識な部分でうけとめられた衝撃を、意識の内側から、いわばそっと手をさし伸べて撫でてやり、そういうことはありえた、またそれはありうることだ、と、しずかに肯定し、肯定することによってその強迫して来るものを認めてやる、そうして認めることによって逆に落着きを得るというぐらいのことは、彼にも難なく出来た。たとえば相当に酒を飲んで酔ったにしても、それでもなんらの異常を認められないところまで彼は来ていた。矛盾した言い方を敢て犯せば、落着いて酔っていることも出来ていたのだ。昨夜も、波止場近くのバーで、それほど酔ったわけではもとよりなかったが、少しのウイスキーを飲んで最後の夜をすごした。そうして夜はよく眠った……。

けれども、やはり緊張していたのだ。それはまた当然であり、必然でもあった。はじめて日本船に乗り、はじめての日本へ行く。そこに、自分の、ポール・リボートのほとんどぜんぶが賭けられている。

大きな、旧式の鍵をステュワードからうけとって船室に入り、魔法瓶から冷たい水を一杯飲み、上着とネクタイだけをとりてベッドに横になった。なんにしる緊張が、ストレスがあると感じられたときには、すぐに眠ることが出来

るように、訓練をつんでいた。それは、あるいはそのみが、大根おおねのところでは、生きて行くについての、いまの彼の貴重な持ち物であったかもしれない。

今朝は七時に起きてシャワーを浴び、八時半には出国手続をおえ、九時に乗船した。出港時間は十一時であった。荷物は、船会社のすすめによって昨日の午後税関検査をおえ、すでに船室に届けてあった。彼の荷物は、当節の船旅をえらぶ人にしてはおどろくほどに少かった。三五〇ポンドまでは無料なのに、税関の役人が、これでぜんぶか、とたずねたほどに少かった。税関のことはともかくとしても、出国手続については、最後の瞬間まで彼は安心していなかった。難点の少い筈の、観光用ヴィザをとっているとはいえ、最後の瞬間に、この国の老大な国家組織の、どこかの細胞から何かの指令が来て出国を拒否されることもないではないかもしれない、と思いつづけていたのであった。けれども、さいわいにして、それは、なかった。誰も彼の過去を問うたりはしなかった。Bデッキ215号船室キャビンの扉に、Mr. Paul E. Ribaut という自分の名を認めたとき、彼は深い息を一つ吐いた。彼の名の下には、受持ちのステュワードとして、Yamahara という名がしるしてあった。

つくづく船室のなかを眺めまわした。といつてなにも特別かわったことがあるわけではなかった。ベッドのすぐ

上の方に丸窓が二つあいていて、金具で嚴重にとざしてある。丸窓は、いずれもいわば出窓のようになっていて、寝て何かを読むとしたら、少し傾斜した窓ガラスまでのあいだに、本をおいておくことも出来る。ベッド自体は、へんに幅の狭いシングルで、木の枠が胸のあたりまでつめてある。藁布団だけで、スプリングは、なかった。枕頭の小テーブルに電気スタンドと灰皿が置いてある。スタンドは、もうアメリカではあまり見かけなくなったような、ごてごてした彫り込みのある装飾つきの、頑丈で古典的なものであった。この船の船齢が、それでわかるというものであろう。三十年近くをすでにこの船は働いていた。テーブルと、ソファではなくてただの椅子一脚、それにこれも妙に背丈だけが低い、細長い洋服タンス、これだけが調度で、あとは洗面台と、トイレットとシャワーがあるだけである。絵一枚、かけてあるわけでもなかった。さっぱりしたものであった。彼はゆっくりと、何度も何度も、この簡単至極な船室を眺めまわした。細長い洋服タンスの上には、救命具の箱がのっている。テーブルの上には、灰皿がのっている。灰皿だけがのっている。花があるわけではない。テーブルの足は、床に固定してある。床にしかれた、青の地にこまかい白の模様のある絨毯は、はしの方が少々まくれ上っていて、ところどころ毛がすり切れていた。洗面台の金具も、

かなり旧式なものであった。それがわるいなどというのではない。金具はすべて磨き上げてあった。彼自身の荷物、大小二つのトランクはベッドの下におし込んであった。

せまい船室を充分に納得の行くまで彼は眺めた。無用の衝撃や驚愕をさけるために、あらかじめ彼自身のいる場所のことを熟知しておかなければならなかった。自分の位置をたしかめておかねばならなかった。そうすることを、彼は心掛けていた。北方の、アリニューシャン群島近くまで船が北上し、大圏航路にさしかかって荒天に見舞われたりしたら、この船室のなかで動き出すかもしれないものは、灰皿などの小さなものを別とすれば、見渡したところ、椅子だけ、のようであった。冷たい水の入った魔法瓶もコップも、洗面台の鏡の横の、金属の環のなかに押し込まれ、そこで固定している。時化のときには、椅子を、テーブルの固定した足にしばらくつけなければいであらう。ベッドの下の特ランク類は、横長い戸をしめればそこに閉じこめることができる。はじめ大小のパイプが何本か通っている白い天井が、ちょっと厭だな、と思ったという、その反応は、眼覚めてみたときには、もうほとんど鎮まっていた。

一時間半ほど眠った勘定になっていた。丸窓から見上げる空は、相変らずどんよりと曇っていた。雨が降っているのかもしれない。部厚いガラスには水滴がついていた。

Bデッキであるとはいえ、海面からはずいぶん高く、艦の方でもあったから、飛沫しぶきであるということはないであろう。昨日は一日、シアトルの町には濃い霧が降り、昼間から琥珀色の街燈がともされ、夜に入って、冷たい雨が降った。

十月半ばであり、また緯度でそれをいえば、極東では樺太島の中部にあたるのであったから、すでに霧と冷雨にとざされていても不思議はなかった。彼は東部から汽車でシアトルへ来たのであったが（飛行機に乗ることはいやだったのだ）、カナダとの国境の、モンタナ州氷河国立公園あたりではもう零下十五度にまで下っていた。昨日一日、昼は霧のなかを、夜に入っては冷雨のなかを彼はゆっくりした歩調で歩きまわった。用件は簡単に済んでいたが、それでも彼は歩いた。ときどき立止っては琥珀色の街燈を仰いだりもした。電報局に立ち寄って、東京の出身也教授に予定通り明日乗船する旨の電報をうったとき、用事らしい用事はもうおしまいになっていた。肌寒かったので、二度ほど町角のドラッグ・ストアに立寄ってコオフィを飲んだ。それを注文するとき、彼のいくらかは長くひっぱり気味なことばのアクセントを聞きつけて、

「南部から来たか」と問うものがいた。

が、これをきっかけにして長話をしたりする気は、別に

なかった。だから、そうだ、とだけ答えて彼は眼を伏せた。港町の、話好きな人々も、眼を伏せた男と無理に話そうとはしなかった。

シアトルでは、東洋美術館を見た。が、ここでも彼は別して気を惹かれるということがなかった。そこには、いろいろな東洋の美術品や刀剣などがならべてあった。彼はそれらを一つ一つこまかく見た。なかでも、一つの仮面が彼の眼を惹いた。説明によると、それは日本の古い女の面であった。その徹底した無表情さ加減、ちよっとした刺激か変化でもあれば、鬼か女か、何者にでもかわりそうな静けさが無気味であった。がしかし、別して感心したり感動したりすることもなかった。後々になってから、なにかのきっかけでその記憶がかえって来るということはあるかもしれない、とはうっすらと思っていたけれども……。彼は日本へ、観光に、見物に行くわけではなかった。商売をしに行くわけでもなかった。彼自身の財産は——亡父母の、油井関係の遺産をも含めてそれはかなりの巨額にのぼっていた——、すでに整理をし、株券や銀行預金などにまとめてしまっていた。家族は、なかった。妻は長男をつれて離婚をしていた。もうひとりの女の兄は、——それはポール・リポートにとって、運命、であった。二人つづけて畸形児が生れたのだ。はじめの子は生後一週間で死んだ。が

二度目の子は、生きた。その子をカトリックの病院にあずけた。妻のマジヨリーが彼を厭い怖れたりしたわけではなかった。また彼が妻を嫌ったりしたわけでもなかった。生活は単純に、不可能、だったのだ。自分自身に対しては、彼は、世界とのつながりが切れたのだ、としか言うことが出来なかった。

彼は日本へ、なにかの研究に行くわけでもなかった。もっとも、日本語をもっと自由に読みかつ話すことが出来るようにはなりたかった。が、それが目的というわけではない。

船は少しずつ揺れはじめていた。その奥の方にシアトル港をもつ、入り組んだビュージェット・サウンドの入江を出て、外海に通じる、これも細長いジュアン・デ・フカ海峽の入口にさしかかっているのかもしれない。

この215号室つきのステュワードがYamaharaという名であったことを、ふと彼は思い出した。ヤマにハラ、である。ヤマはおそらく「オン・ヨミ」では、サンであり、「当用漢字」の38号にある「山」であらうし、ハラというのは、「オン・ヨミ」のゲンであり、205号の「原」であらう。山については、山道、山脈、登山などのことばを思い出し、原については原因、高原、草原などの用例を思い出してみた。フランス語とスペイン語を話す彼にとつ

ても、日本語は、真に怖るべきことばであった。彼は病院にいたあいだに、入手できる限りの本とレコードをあつめ、更に連絡のつく限りの日本人とのあいだに録音テープを交換したりして習ったのであった。この船は、戦争前からの古い船であるためか、掲示につかつてある日本語は、たとえば「一等船客の外は御断り申上候」というような見ないことばがつかつてあったりして面喰らわされた。案内をしてくれたステュワードの山原は、眼鏡もかけていず、また平べったくもない、どちらかといえば彫りの深い顔をした青年であったが、ポール・リポートがこの部屋のドアのところ、青年に向って、

『どうか、よろしく』

と言ひ、また、

『ありがとう、ございます』

と言つてみたときには、にっこり笑つてくれた。その笑顔は、彼にとっては言いしれぬ安心事であったのだ。安心事——それをほかの人に話してみても、滑稽なだけのことであることは、それだけは彼にも身に沁みてわかつていた。

「ヤマハラ、ヤマはサン、ハラはゲン」

と呟いて彼は起き上つた。

起き上つて備付けのスリッパをひっかけ、片手を頬にあて、ぐるぐると狭い船室のなかをまわりはじめた。一まわ

り、二まわり。三回目を彼がゆっくりと歩いている。船の揺れ方は、もとより彼の歩行をさまたげるほどのものではない。彼が、二回、三回、四回とまわるごとに、洗面台の鏡は彼の横顔をうつし出していった。

鏡にうつし出されたボール・リボートは、四十一歳、背丈は、アメリカ人としては低い方で、まず中背といつてよく、栗色の髪は濃い方ではなく頭の地が白くすけて見えていた。容貌は、醜い方ではなかったが、頭ゼンたいが両わきから押潰されたようなふうで額と後頭部が少し長めに、誇張をしようとするれば少々は額と後頭部がとび出しているようなかたちをしていた。従つて額は高くて狭く、くぼんだ眼窩の奥の薄い青色の眼は鋭く、長い時間を一つのところに坐り込んで考え込んだり、一つのものを凝視したりすることになった人のそのように、視線をかわしたりしたときにはきらりと異質な光りを発するかと思われた。鼻はといえば、ある種の若い女にあるような鋭角的な角度をもつていて小さく尖っている。唇は薄く、顎もとがっていた。四十一歳とはいふものの、意外に若々しくて三十五六歳といつても人は信じたであろう。顔全体の表情は、観相の方の専門家でもが観たならば、この人にはなにかしら病的なところがある、と特にそのこけた頬と薄い唇の妙に不釣合な赤さに注目したかもしれない。が、それとても、

ある種の重病からの恢復期にある、とでももし彼が説明したら、誰にしてもそれとして納得しえたであらう。ぐるぐると歩きまわる彼をちらりちらりとうつし出す鏡は、見えない何物かを凝視していると同時に放心している、考え込むことと放心していることが同質と化しているかのよう、いわば真空ということばをつかいたくなるような彼の顔の表情を見せていた。真空——人あつてあるいは、仮面のようだ、というかもしれない。

ようやくぐるぐるまわりをやめたボールは、今度は二つの丸窓にむかった椅子に腰をおろし、テーブルに肘をついて両の掌で頬をかかえ込んだ。

船は少しづつ揺れ方をまして来ていた。

「おれは一本の樹であつた」

と、彼はつぶやいていた。洗面台の鏡は彼のつき出た後頭部と背中をうつし出していった。

「痩せて貧相な、たとえばアリゾナやニュー・メキシコの荒地に生えているサワロロというサボテンか、カリフォルニアのデス・ヴァレー砂漠の葎のようなものだったかもしれないが、それでも一本の樹ではあって、根を大地におろして生きるためのものを吸い上げていたと思う。それが、ある日の、おれの足の下での光りと爆発によって、根からくつがえされ、逆に根を天にさし上げ、頭で生きるための

ものを吸おうとするようになったらしい。は、は、は、……」

乾いた笑い声は、船室かぶしのなかで反響するわけでもなく、忽ち鈍いエンジンの音に吸い込まれて行ったが、そこで立ち上って、再び鏡にちらりとみせた彼の顔は、笑い声にもかかわらず、今度は本当に仮面のように、いささかも笑っていないかった。

二回、三回、またぐるりぐると狭い部屋を歩いて、再び椅子にかけた。

一人の男の、あるいは女の、真の相貌を深く把握するとなれば、そこに、当然、さまざまな道があるであろう。そうして、そのさまざまな道のうちの一つは、彼が、あるいは彼女が一人ぼっちで、他の人間に煩わされずにいるところを観ることであろう。一人で、たとえば野原を歩いていくところを観るのもよいかもしれないが、ひょっとして歩くという運動が、その彼、あるいは彼女に干渉をしてくるかもしれない。天候も影響を及ぼすかもしれない。そういう意味では、いま日本の古い客船氷川丸のNo.5号船室に一人だけで閉じこめられているポール・リポートは、筆者である私にとっても、また読者である諸姉諸兄にとっても、彼を観るためにもっともよい機会であるであろう。けれども、それを煎じつめて行けば、そういう一人ぼちな彼

を真に観察し、深く把握することを許されているのは神だけであるということになる筈であり、たとえばこのポール・リポートに、

『君は神を信ずるか』

と問うて、

『私には、わかりません』

という答えを得たとしても、やはりそれは許されてはいない筈である。そうして、彼が誰か他の人と一緒にいたり話し合ったりしているときには、彼は必らずや、その、他の人から来る、彼自身にはないものの影響をうけ、反射的になり、活動し高揚し、あるいはその逆になる。それは発展であり、変化であり、関係であり、小説はそこから人間を描くすべをもつことが出来ないのであるが、しかし、ポール・リポートが、自分がアメリカにおいて得ることの出来る最終判決は得てしまった、すなわち最終判決はなかった、と感じている、従っていわば一つの物語が終ってしまったところから、終点からの旅に出ていると感じているのであるとしたら、われわれは、せめてもうしばらくはこのポール・リポートといっしょにいななければならないであろう。

彼は再び椅子から立ってベッドに横になった。しばらくそのまま凝っとしていて、昨夜、港近くのあるバーで出会

った女との会話を思い出していた。女は黒いブラウスに赤いジャンパースカートを着ていた。彼女が彼に南部から来たか、と問うた。彼は、そうだ、と答えた。音楽が好きかと彼女が問うた。彼は、短いやつは好きでない、と答えた。なぜだと問い、かさねて、短いやつというのはジャズのことか、と問うた。彼は、短いのはすぐにおわってしまつて、それに次から次へとまつたく變つたものが出て来るから、氣が散つて、持統のなかにいるという氣がしなくなるから、と答えた。女は、眼をつりあげて、氣を散らすことのどこが悪いのだらう、この人生で氣を散らすことを除けてしまつたらどうしていったい生きて行けるものだらうか、お前さんはよっぽど變つた種類の標本らしい、シアトルの漁業博物館へでも入るといい、魚はたしかに持統的に生きているらしいからね、と言つた。そう言つてから、女はジューク・ボックスへ金を入れ、彼が好きでないといったジャズをかけ、酒をおごつてくれ、と言つた。酒が来ると、女は、南部の男は嫌いだ、と言つた。彼は、そうか、と答えた。酒がなくなると、女は、寝に行こう、と言つた。彼は、厭だと言つた。女は、自分はニューヨークにいたことがある、と言つた。彼は、そうか、と言つた。それからまだいろいろな問答をした。この赤と黒との女の言うことは、真に支離滅裂であつた。彼女の思いつく話題と話題のあいだ

には、まったく何の連関もなかつた。まったくの非連続で、彼には、この女は精神病院に入るに充分な資格をもっている、と思われたが、人々は彼女を決して精神分裂者とも異常者ともあつかつてはしなかつた……。彼は短くうけたえをしなから、彼女の表情の変化を注意していた。彼女は、まるである種の映画女優にそっくりな表情をつくつた。それは表情が自然に動くというふうではまったくなくて、それはほんとうに、つくる、というものであると彼には思われた。短い音楽が止むと、その瞬間に、彼女は白紙のような、ある種の仮面のように無氣味な表情にかへつた。何といえぱいいのか、ばらばらに崩れ落ちた、非連続な世界に居候をしている女、あるいはまた、瞬間瞬間の出来事や思いつきがばらばらに投げこまれる充塙物か映画のスクリーンのようなもの、というふうに見え、また別の瞬間には、非連続そのものが人間の像をとっているか、と見えた。そうして、そういう世界は、実は彼にとってはあまりにも近しいものであつたのだ。船室の白いドアに、黒いブラウスに赤いジャンパースカートの、セシルというのだといった女をピンで刺しとめるようにして見詰めていた。

そのとき、ドアが、カタリという小さな音をたてて内側にひらいた。誰も、入つて来はしなかつた。エンジンの音がたかまつた。

一瞬、彼はぎょっとしたが、すぐに、ああこの船は古いのだ、ドアの止め金がすりへりパネが甘くなっている、なにかの拍子にはひらいてしまうのだ、あけておくか、鍵をかけておくかしなければならぬのだな、と思った。そして彼の物思ひは、セシルという精神分裂症のような女から、彼のいた精神病院で、彼自身がぶつかった革命的な事件に移って行った。

彼自身は、それほど重症でもなく、狂暴性はなく自殺の虞れもないと判定されていたので、つねに鍵のない部屋にいたのであったが、一九五五年のある日、病院は、それまで嚴重に鍵をかけてあった病室の数々に鍵をかけない、自由に入出入り出来ることにする、という精神分析学という環境療法にもとづく方針を決定し、実施した。それは、それまで二六時中閉じこめられていた患者たちにとって、一時はほとんど恐慌状態を來たした。ある女の患者は、泣き叫んで看護婦長の部屋へとび込み、彼女の係りである看護婦が、『発狂してしまった、わたしちよりもひどい氣違ひになつてしまった』と告げた。看護婦が鍵をかけないで行ってしまった、というのであった。

また、二十年のあいだ、眼覚めている時間の大部分を(逃

亡するために)鍵を点検してすぐして來たある男の患者は、鍵がなくなった、となると、部屋から出ることを拒否してしまつた。一旦出てしまつたら、二度と入れなくなる、戻れなくなるのではないか、とこの患者は怖れた。

鍵からの自由は、もとより何段階かにわけられていた。二十四時間、まったく鍵なしで外出も自由な患者から、一日、十二時間、六時間、三時間……。しかし、この自由はある患者にとっては眼覚しい効果をもたらした。それまで自分の排泄物の上に坐ることの好きだった孤独な患者は、看護婦や医者だけではなく、仲間の患者が自由に來訪してくるとなると、いつかそういう汚穢のなかからまぬがれて出るようになった。

彼の親しくしていた病者たちは、そのほとんどが決定的な持続の世界に生きていたのだ。ただ一つの経験、ただ一つの觀念に、生きていた。固執し偏執して生きていたと言ふべきなのであるが、あのセシルという女のように、連関性の喪失と分裂が常態化されているのに比べれば、病者たちはむしろ非連続の世界での、そのばらばらな環のうちのどれか一つを決定的に重大視し、その単一の持続性のなかに生きている、と言いなおしてもよいようなものであつたらう。

ポール・リポートは、いまではもう精神分析学の主要を

心得てしまっていた。アメリカの新興宗教ともいふべき俗流のそれからかなり専門的なところまでを、患者であった彼自身が心得ていた。精神分析学は、彼の一つの経験、一つの観念、それに彼がしがみつくことによって麻痺した内部に、ふたたび、いわば血行を恢復させ、従つて運動を呼び起し、その一つの経験、観念を、他の経験、観念と同じ水準にまで引き上げておののつながりをもう一度もたせようとする。引き上げて、といっても同じことであろう。孤絶した経験、観念に、他との関連、連続をもたせようとするのである。

ということとは、しかし、たとえばアメリカでの最後の夜に出会ったあの黒いブラウスに赤いジャンパーズスカートをはいたセシルという女のように、そうしてまた彼女が二六時中それを聞いていないと、ほとんど生きていられないかのような、あのジャズのように、それぞれの経験、観念が、そのいずれもがさして重要視されることもなく、ばらばらに放置されていて、しかもなお平気であるという、そういう非連続な世界、人間のそういう在り方へ戻そうということではなかったか。深層心理学による治療もまた、これとそう距るものではない、とポール・リポルトは思っていた。彼は、いわば精神分析学と深層心理学を疑うことによって、*「治癒」*したのであったかもしれない。*「治癒」*はあり

えないと信じることによって *「治癒」*したのであるかもしれない。彼は *「治癒」* を目的とはしなかった。

誰にしても、人の固執する一つの経験、一つの観念は、その人に固有のものであって、他者のものではない。しかし、科学はそこに辿りうべき共通のものを求めて類別する。けれども、ポール・リポルトの一つの経験、一つの観念は——ここで彼は口許を歪めて無気味に、にやり、と笑った。

患者たちは自分の経験、観念の独自性、唯一無二であることを信じて科学のする類別と闘い、やがて降伏して、*「治癒」* をする。そうして非連続にみちみちた日常生活へ、*「正常」* としてつきもとされて行く。彼は、物質のように備えもなく分裂と手を取りあって生きて行く。

彼が霧のなかを琥珀色の街燈をたどって歩いてい、外套がしっとり濡れて来たので *「オリンピック」* という、シアトル対岸の国立公園の名をそのままとったバーへ入って行ったとき、セシルはいなかったのだ。彼が一杯のウイスキーを前にし、バーマンが、音楽はどうか、といってジューク・ボックスをさし示したときに、彼女が入って来た。黄色いレーンコートを、手を通さずに羽織っていた。黒と赤と黄の対照が強烈であった。彼女を見掛けて、バーマンは露骨に厭な顔をした。貸しがあるか、あるいはそんな女